

# e ラーニングを活用した英作文指導

## —英作文自己添削ソフト「作文くん」—

福嶋 雅直

### 1. はじめに

コロナ感染拡大の影響で、リモート学習せざるを得なくなり、ICT教育への関心がさらに高まった。ICT (Information and Communication Technology) とは、コンピュータや通信情報ネットワークなどの情報コミュニケーション技術のことであり、ICT教育は、ICTを活用した教育活動や取組の総称である。パソコン、プロジェクタ、電子黒板などのハードウェアから、無線LAN、eラーニング、デジタル教科書、学習用ソフトウェアまで多岐にわたる。eラーニングは主にインターネットを利用した学習形態のことで、「オンライン学習」と呼ばれることもある。現在利用できるeラーニング英作文ソフトウェア(以下「ソフト」)としては次のものがある。

- ①適語選択タイプ    ②語句整序タイプ  
③機械添削タイプ    ④人間添削タイプ

①②は無料で利用できるものが多いが、どれも答えが1つに限定されていて、別解は認められない。③は英文ライティングツール Grammarlyのような、英文を入力すると自動的に添削してくれるもの。文法ミスのチェックにはかなり有効であるが、文脈や細かなニュアンスを考慮した添削はできないので、正しい英語であるかどうかは保証されない。④は添削者の英語力が問題となるが、最も信頼性が高い。ただし、ほとんどが有料サービスであり、現場の教師からすれば生徒に薦めにくい。

これらの欠点を解消し、無料でだれでも利用できることを目指して開発した、英作文自己添削ソフト「作文くん」を紹介したい。「作文くん」自体は福嶋(2011)ですでに紹介したものであるが、今回の「作文くん」はeラーニングソフトとして完全リニューアルしたものである。学習者はもちろん、それを指導する教師もサポートすることを目的に開発したものである。本稿では、「作文くん」の特徴を紹介しながら、英作文の指導について考えていきたい。

### 2. 「作文くん」開発の経緯

これまで和文英訳の授業では、すべての生徒の答案を事前に回収して添削をし、それをもとに解説をしていたので、大変な労力を費やしていた。ある日、この添削を通じて最も学力がついているのは私自身ではないかと思いついた。何度書かせても同じような間違いを繰り返し、自分で自分の答案を見直す時間を怠っている生徒が多かった。これに対して、添削をするために、本当にその表現が正しいのかを辞書やネットで調べたり、同僚の先生やネイティブの先生に質問したりすることを私は日常的にやっていた。こうした試行錯誤を繰り返す中で、英作文力がついたと実感できた。

この経験から、英作文学習の最終目標は自己添削力をつけることである、と結論づけた。自己添削力とは、自分で作成した答案が一般に通用するかどうかを自分で判断できる力である。この目標実現をサポートするツールとして「作文くん」を開発した。

### 3. 「作文くん」の特徴

#### (1) 多様な答案に対応する。

私の前任校でも採用していた数研出版の『入試必携英作文 Write to the Point』(以下『必携英作文』)は、模範解答がどの問題集よりも詳しいため、生徒の多様な答案にもほぼ対応することができる。ただし、付属の詳解の模範解答を提示しても、適切に自己添削できない生徒が多かったので、教師による添削が必要不可欠である。しかし、作文くんではこれらの解答を入力しておきさえすれば、自動的に生徒の答案と照合して最適な解答をピックアップし、添削を行うことができる。多様な答案に対応と言っても、模範解答が100以上あり、それを教師が一つ一つ手入力するのであれば、現実的なソフトとは言えない。

(例1)最近のある研究によると、一週間に数回、30分くらいのジョギングをする人は、長生きする可能性が高いそうだ。(『必携英作文』p.37より)

(a) According to recent research, [a recent study,] those who jog [go jogging] for about thirty minutes several [a few] times a week will probably [are very likely to] have a long life. [live (for) a long time. / live longer than those who do not.]

(b) Recent research [A recent study] shows (that) those who jog [go jogging] for about thirty minutes several [a few] times a week will probably [are very likely to] have a long life. [live (for) a long time. / live longer than those who do not.]

(解答は、『必携英作文』の詳解をもとに福嶋が再編成したもの)

( )内の表現は省略可能であり、[ ]内の表現は直前の下線部の語(句)と交換可能であることを示している。この模範解答を展開すると、次のように表現を少しずつ入れかえながら、一文単位の模範解答に直すことができる。

① According to recent research, those who jog for about thirty minutes several times a week will probably have a long life.

② According to a recent study, those who jog for about thirty minutes several times a week will probably have a long life.

これを続けていけば、192通りの模範解答を作成することができる。人間にとっては逆に煩雑でわかりづらいのだが、コンピュータはこのように展開したものでなければうまく認識できない。「作文くん」では、(例1)のように模範解答を入力するだけで、自動的に192通りの英文に展開して添削に利用することができる。

## (2) 問題の編集や管理がしやすい。

実際に「作文くん」を使っていくと、「作文くん」に自分で登録した模範解答のミスに気づくことがある。こうした場合、「作文くん」ではそれをリアルタイムで修正して反映させることができる。問題はGoogle スプレッドシートで作成し、それをそのままシステムに取り込むようになっている。問題は教

師ならばだれでも編集することができ、編集が終わればその結果は自動的に「作文くん」に反映され、教師の手間も最小限で済む。

また、問題の中には学内のユーザーに限定したい場合が多い。「作文くん」はGoogle Apps Scriptをベースにしているので、問題の共有範囲を指定して管理することが簡単である。逆に問題を一般に公開してだれでも使えるようにすることもできる。

## (3) 模範解答をすぐに提示しない。

第1段階：ヒントなしで問題に取り組む。

第2段階：ヒントボタンを押して、語句や文法のヒントを参考にし、答案を訂正する。

第3段階：提示される不要な語句や必要な語句のリストを参考にし、答案を訂正する。

第4段階：模範解答を参考にし、答案を訂正する。「作文くん」では、添削を上記の4つの段階に分けている。生徒にとって、パソコンを使って学習することへの目新しさと興味から、「作文くん」を使った学習にはかなり好意的である。その一方で、正解するまで次の問題に進むことができないので、一問一問にかかる時間が従来の学習よりも長くなり、しんどいというのが正直な感想である。しかし、生徒が最初から最後まで主体的に和文英訳に取り組むには、上記のような段階を踏んで、試行錯誤を繰り返しながら正解にたどりつくというプロセスを多く経験し、その中で必要な知識や技能を身につけることが必要不可欠である。

## (4) ゲーム感覚で学習を進めることができる。

「作文くん」では、1題につき4点満点で採点を行う。(3)の各段階で、答案の入力を終わると添削ボタンを押すことになる。第2段階以降、添削ボタンを押すごとに1点減点される。第3段階は添削チャンスが2回あるので、第4段階までくると添削ボタンが4回押されるので、点数は0点となる。つまり、模範解答を見ながら答案を書いても0点にしかならない。私の授業では合格点を決め、それ以下の場合にはやり直しとしているので、生徒は高得点を取れるように必死で自分の答案と向き合っている。

## (5) 入力ミスをサポートすることができる。

学習者がパソコンで英語を入力する際、タイピングミスが非常に多い。例えば、単語と単語の間に2スペース以上入れたり、文頭や文末に不要なスペースを入れたりすることが意外に多い。また、Enter

キーを押すつもりで不要な記号を入れてしまうことも少なくない。さらに、He is not と入力すればよい所を He isn't のように短縮形を使う者も多い。従来のソフトではこれらは不正解とされたが、「作文くん」は自動的に修正して認識することができるので、本来の英作文学習に集中することができる。

#### (6) いつでも質問のやり取りができる。

授業で「作文くん」を使う場合は挙手して質問すればよいが、家庭学習で「作文くん」を使う場合、問題画面にある「質問」から質問フォーム(Google Forms)を呼び出し、担当教師に直接質問することができる。それに対して教師はリアルタイムで返信することができる。また、質問フォーム処理用スプレッドシートを使えば、質問を一括して処理できるだけでなく、教室に設置のプロジェクタやスクリーンと連携してそのまま解説に使うこともできる。私の前任校では、オンライン授業の際、その期間はWeb 会議サービス Zoom の画面共有機能を利用して解説に使っていた。

#### (7) 自己添削の方法が身につく。

全問解き終わると成績画面になり、解いたすべての問題について、問題、点数、自分が最初に書いた答案、自分が最後に書いた答案(正解文)が表示される。最初に書いた答案と正解文を見比べることで、どのように自分の答案を訂正すればよいかを復習することができる。実はこの作業こそが自己添削で一番大切な作業である。『必携英作文』の Exercises を授業で扱う場合、私は次の流れで進めている。

[第1時限] 基本文を音読してポイントを説明後、Exercises でどのように使うかを考えさせる。

[家庭学習] 基本文を暗唱し、問題をノートに解く。  
[第2時限]

- ①「作文くん」で基本文をテスト形式で練習する。
- ②「作文くん」で Exercises の問題に取り組む。  
第1段階では、自分がノートに書いた答案を入力する。
- ③質問があれば、随時挙手して質問するか、質問フォームで質問する。
- ④成績画面で、正解文を見ながら、ノートの答案を赤で自己添削する。
- ⑤質問があれば、③と同様に質問する。
- ⑥成績を教師宛に送付する。

#### (8) 教師用端末で、生徒の成績や答案を迅速に確認することができる。

成績画面に表示される内容は、教師が持つ端末(携帯電話、iPad、パソコンなど)にも転送されるので、進捗状況や点数が特に低い問題についてどのような間違いが多いのかなどを分析して、フィードバックを与えることができる。

#### (9) 多様なデバイスに対応している。

「作文くん」はブラウザ上で動作するので、Chromebook はもちろん、Windows パソコン、Apple デバイス(MacBook や iPad)でも使うことができる。また、音声入力を備えたデバイスであれば、タイプする代わりに音声で入力することもでき、スピーキングの練習にもなる。

### 4. 「作文くん」を活用した自己添削の実例

「作文くん」がどのように学習者の自己添削をサポートするかを、具体例を挙げて説明していきたい。ここでは、模範解答を(a)(b)(c)、生徒が書いた答案を(S)、添削結果を(R)として表す。また添削文中の[word]はその語を消す、(2 words)はそこに2語補う(消した語句を含む)という指示である。

(例2)近年、電子書籍の普及が急速に進んできた。  
(『必携英作文』 p.9 より)

- (a) Nowadays(,) [These days(,)] more and more people read[are reading] digital books.[electronic books./ e-books.]
- (b) Nowadays(,)[These days(,)] the number of people who read digital books[electronic books/ e-books] is increasing rapidly.[fast/ quickly.]
- (c) In recent years(,) the number of people who read digital books[electronic books/ e-books] has been rapidly[fast/ quickly] increasing.

(解答は『必携英作文』の詳解をもとに福嶋が再編成したもの)

#### 【第1段階】

- (S) In recent years, people who read digital books are increasing.
- (R) In recent years (3 words) people who read digital books [~~are~~] (3 words) increasing.

## 【第2段階】

- (S) In recent years, the number of people who read digital books have been increasing.
- (R) In recent years, the number of people who read digital books [have] (1 word) been (1 word) increasing.

## 【第3段階】

- (S) In recent years, the number of people who read digital books has been rapidly increasing.

第1段階、生徒は模範解答(a)(b)(c)をミックスしたような英文を書いた。第2段階、ヒントを参照して、(c)パターンで書けばよいと判断して答案を訂正した。第3段階、ほぼ正解に近づいたが、haveの数のミスと「急速に」にあたる表現が欠けていることに気づき、さらに答案を訂正し、ようやく正解にたどり着くことができた。

## 5. 「作文くん」を使うメリット

- (1) 必要な模範解答だけを提示しつつ、すべての模範解答を網羅できる。

模範解答を生徒に示す場合、(例2)で示したような模範解答(全部で39通り)では詳しく、生徒にとっては逆にわかりにくいこともある。また、授業進度や効率の観点からすれば、次の3パターンくらいに留めておきたいところである。

- (a) These days, more and more people are reading digital books.
- (b) Nowadays the number of people who read electric books is increasing fast.
- (c) In recent years, the number of people who read e-books has been quickly increasing.

しかし、(c)に近い答案を書いた生徒によっては、digital books や rapidly ではダメなのかといった疑問が残るかもしれない。「作文くん」を使えば、必要な模範解答だけを提示しつつ、生徒の答案をほぼすべて網羅することができるので、より効率よく授業を進めることができるだけでなく、従来の和文英訳の授業ではフォローしきれなかった答案や間違いをサポートすることができる。

- (2) 正しい知識を積み上げる習慣ができる。

和文英訳で最も大切なのは、生徒が自分で書いた答案を添削し、正解を確認することである。しかし、

自分が書いた答案と大きく異なるものを正解として写したり、ミスを見落としたままにしたりするかもしれない。「作文くん」は、正解を自分で一度は書かないと次に進めないようになっているので、必ず正解で終わることができ、正しい知識を確実に積み上げることができる。

- (3) 個々の生徒の理解度や処理速度に合わせて学習を進めることができる。

一斉授業では、なかなか個に応じた指導を実践することは難しい。「作文くん」は、それぞれの生徒のペースに応じて添削をするので、できる生徒はほとんど先に進めばよいし、「作文くん」の添削ではよく分からない生徒に対しては、教師が個別に対応することができる。

## 6. おわりに

野澤(2014)が指摘するように、eラーニングだけでは求められるすべての教育・学習環境で最善策にはなりえない。従来型の対面型授業／集合学習、さまざまなICT、教師と学習者たちが協調的に支え合うインタラクティブなeラーニング授業を組み合わせて、教育効果の相乗効果を持続的に生み融合型学習法(ブレンディッド・ラーニング)を実現しなければならない。最適なシーンで最適な方法を選択することが、これからのeラーニングの重要なポイントである。「作文くん」も、授業で教師の代わりをするものではなく、個別に最適化された学びのために、一人一人の理解度・レベルに応じた添削をし、よりきめ細かく生徒の英語学習をサポートできるツールとして、これからも改良に努めていきたい。

## 参考文献

- 野澤和典(2014). eラーニング. 最新ICTを活用した私の外国語授業. 吉田晴世・野澤和典編. 丸善プラネット. pp.15-25.
- 福嶋雅直(2011). 自己添削力をつける英作文指導—英作文自己添削ソフト「作文くん」—. *CHART NETWORK* No 64. 数研出版.

(大和大学 准教授)